

# 国際理解セミナー

## 「今だから言える中国本音事情」を開催しました。

2012年8月25日（土）、鈴鹿市文化会館さつきプラザにて、国際理解セミナー「今だから言える中国本音事情」を開催しました。参加者は44名。

「ありのままの中国を知ることによって偏見が薄れるかもしれない。中国人が嫌いになるかもしれない。しかし無関心よりはまだましである。」

キャッチーなタイトルに加え、折しも中国に関しては、「尖閣諸島」をめぐる問題が毎日のようにニュースになっているこの時期。参加者の関心もかなり高くなっていたと思います。



よしかわともひろ

講師は、吉川友公さん。

1997年、広東省深センでコンサルタント会社を設立し、日系企業の中国進出をサポートすると共に、各省において日本の技術や経営、文化等を学ぶための日本学科を開講する。

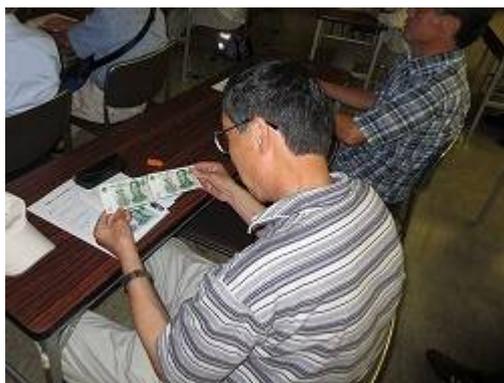
現在は香港商報新聞社と共同で、WEBサイト「JAPAMチャンネル」を開設し、記事を掲載。

テーマは「中国」と「中国人」。これは、分けて考える必要がある、ということでした。

国としての中国は、貿易相手国としては今やアメリカを抜いて貿易額1位の国であり、約30万人もの日本人が中国で働いています。そして、日本でも在留外国人の3人に1人は中国人であり、台湾・香港・シンガポールから年間300万人を超える観光客が日本を訪れ、その内、約100万人が大陸の中国人です。

しかし、中国では日本をライバルとは考えていない、日本を敵対視する政策がとられている、法治国家より人治国家であるため、ルールがめまぐるしく変わる等、マイナス面のお話もありました。特に、人権がないがしろにされているというお話の中では、ipad 欲しさに腎臓を売った高校生の話や、日本でも報道された広東省仏山市で起きた交通事故者を置き去り事件などの事例があがりました。また、事故で人が亡くなった場合も、人の命の値段（賠償金）が家庭環境によって変わる、など人間の尊厳が失われてきている現実なども知ることができました。

そして、ニセ札もかなり出回っているとのこと。会場にお越しの参加者の中にも3名ほど、ニセ札を受け取った経験がある、ということでした。



吉川さんが中国で手に入れたニセ札をじっと見る参加者

一番気になったのは、自殺者の数です。日本は40～60代が多く年間約3万人ですが、中国は15歳～34歳、年間約30万人とか。公表30万ということは、実質100万人近いということでした。こんなに若い年代層が、自殺するという社会背景に、中国が抱える問題が垣間見えてきます。現在の毛沢東太子党と共産党青年部との対立、拝金主義の問題などの他、大変ショッキングな内容のものまで、事実は事実として説明がありました。



国としての中国を見る一方、中国人としてはどうか？中国人は本当に日本人が嫌いなのか？  
言論NPOによる2012年日中共同世論調査の結果によると、

日本人の中国への好感度 15,7% (昨年 20.8%)	に対し⇒	中国人の日本への好感度 31,8% (昨年 28.6%)
日本人の中国への嫌悪感 84,3% (昨年 79.2%)		中国人の日本への嫌悪感 68,2% (昨年 71.4%)

中国人の日本人に対する感情は、日本人のそれに比べると、思ったほど悪くありません。むしろ、韓国人に対する感情よりも日本人に対する感情の方が良好だ、ということでした。また、印象的だったのは、中国人は新聞より風評を信じるということでした。現在、インターネットによる情報拡散については「3分が命」と言って、当局から削除されない3分の間に、届けたい情報を掲載するそうです。そして、特に心に残ったのは、“国境を越えれば「MONOSASHI」も変わる。日本は世界で稀な善人の国”という言葉でした。話もいよいよ佳境に入り、さらにもっと興味深いお話に移行しようか…という所で、残念ながら時間が来てしまいました。内容が盛り沢山で、全て話して頂くには、時間が足りませんでした。反省も込めて、次回、出来ればシリーズにして3回程の連続講座を組もうと思います。

参加されたお客様も、中国に関する知識のレベルが様々で、十分に面白かった人、物足りなかった人、もう少し突っ込んだお話がしたかった人、様々でした。是非、第2弾を企画しようと思います。

最後に、国際交流と言うのは、国対国ではなく、個人対個人の血の通ったお付き合いだと思います。講師の吉川さんもおっしゃいましたが、一步国境を越えれば日本で当たり前のことがそうではなくなる。お付き合いをする上で、相手が自分の常識からかけ離れたことを言った時、すぐに憤慨するのではなく、まず、相手の生まれ育った環境・教育・社会背景を正しく理解した上でお話ができれば、良い関係を築いていけるのではないかと思います。

講師の吉川さん、参加者のみなさま、ありがとうございました。